



● 巻頭言

結成2年半を振り返って

日本小児科医会会長

内藤 壽七郎

日本小児科医会会報の第2号が発行されることになった。創刊号は表紙の絵柄の選定から編集などについて木島理事をはじめ広報委員の方々のご努力を深謝したい。

わが小児科医会も結成後2年半を経た。これを人間の成育にたとえれば、自我が強く芽生え、その存在を強く主張する時期に相当するのだが、わが医会はどうであろうか。ひいき目かもしれないが、ようやく各方面にその存在を知られて来ているのではあるまいか。これは各役員が忙しい診療の間を縫って手弁当で活躍されていることと、会員の方々の大きな援助があるからに他ならないであろう。

しかし財政的な面では後から結成された他科の医会に大きく遅れをとっているような面もみうけられ、これでは息切れしてしまう恐れが多分にあるのではないだろうか。

日本の医療費を一定の枠内に納めようということが企画されているが、この場合その分け前について弱肉強食的なことが行なわれてはならない。1986年、アメリカにおける各科別の年間収入のグラフが『日経メディカル』に掲載されていた。それによると小児科は最も低い。文化の進んだと思っているアメリカでこのような始末であるのに驚きを禁じ得なかった。診療の相手が子どもであるから、不平をいわないから、薬の使用量が少ないから、等々の理由でもあるのか…。

物いわぬ子どもであればこそ一層注意深い診察や観察が必要となるはずである。直接本人の訴えでなく、母親あるいはこれに代わる人がみた主観と客観の混在した訴えをよく聞いて、そのなかから真実を選別しなければならない。大変な時間と技術を要するのである。薬用量も無難な少量では効き目のないことも多い。その適量判断も大変なものである。このような表面に現われない精神的労作がはなはだ多い診療科であるのに、これらが全く評価の対象として取り上げられていない。

会員の方々と一緒に新しい知識を学ぶとともに、子ども達のためにさらに手を固く結んで前進しなければならないと思う次第である。